二つの川

鈴木喜代春

収録作品について

「二つの川」　　ポプラ社の創作文学・14
(1971・7.刊) ポプラ社

ISBN4—591—02764—3
N.D.C. 913

二つの川　　ポプラ社文庫　A218

著　者　鈴木喜代春　©

1988年2月　第1刷

検印省略

発行者　田中治夫
発行所　株式会社 ポプラ社
東京都新宿区須賀町5
〒160 振替東京4-149271

印刷所　暁美術印刷株式会社
製本所　大和製本株式会社

編集　井澤みよ子

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

二つの川

鈴木喜代春

ポプラ社文庫　A218

もくじ

第一章　谷中遊水池　6
1　天皇巡幸　9
2　自由民権　14
3　ういた魚　18
第二章　渡良瀬川　30
1　田中正造の手　32
2　質問書と答弁書　39
3　三百八十八名のひとり　44
第三章　雲竜寺　54
1　示談　56
2　請願陳情　75
第四章　被害民のむれ　93
1　毒塚　95

2 タケの根 102
3 小さなわらい 106
4 「また負けた」 121
5 川俣事件 132

第五章 もうひとりの作次郎 150
1 江差へ 154
2 易国間 164

第六章 神通川 181
1 牛が首用水 184
2 神の通る川 192
3 いたいいたい 198
4 悪魔の通る川 216

第七章 終わりで始めの章 227

解説／西本鶏介 231

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

・**作家紹介**

鈴木喜代春（すずき　きよはる）

一九二五年、青森県に生まれる。青森師範学校卒。長年教員生活を続けるかたわら、児童文学の創作にたずさわる。代表作に「白い河」「二つの川」「十三湖のばば」「三年二組の野口英世」がある。

・**画家紹介**

鴇田　幹（ときた　かん）

一九三二年、千葉に生まれる。日本グラフィックデザイナー協会、白磯会会員。作品に、「新十津川物語シリーズ」「武田信玄」「上杉謙信」などの他、雑誌、新聞など、はば広く活躍中。

二つの川

鈴木喜代春　作　鳩田　幹　絵

第一章　谷中遊水池

ヨシキリが鳴いていた。

アシとカヤのはてしなくひろがる谷中遊水池で、ヨシキリがさかんに鳴いていた。

昭和四十四年の六月末のその日、わたしは、谷中遊水池の土手にはじめて立った。生まれながらの百姓である父、作次郎が、百姓として生きようとしても、二つの川はかたくなにこばんだ。渡良瀬川と神通川の二つの川は、父、作次郎を百姓として生かしてはくれなかった。わたしはその父のあゆんだ、くるしみとかなしみの生涯を、この足でたどり、この目でたしかめようと思いたった。父の死んだのは、昭和三十六年の春だった。それから約八年たったこの日、わたしは、ようやく谷中遊水池の土手に、立つことができたのである。

アシとカヤが思いのままにしげって、どこまでもどこまでもひろがっている、

ここ谷中遊水池は水をまんまんとたたえて、はるかかなたにかすんできえるまでは、文字どおりただ遊ぶ土地であった。変化もなく、いろどりもなく、人間の営みのひとかけらもなく、ただアシとカヤだけが、思いのままにしげり、遊びつかれたような、わびしさとむなしさだけがそこにあった。

このわびしさとむなしさが、目のまえにうかぶしわにきざまれた父、作次郎の顔とかさなったとき、わたしの胸はつまり、たえてもたえてもなみだのこみあげてくることを、どうすることもできなかった。

わたしの父、作次郎は、足尾銅山のながす鉱毒とたたかった農民のひとりであった。ところがながいながい鉱毒とのたたかいも、谷中遊水池をつくることによって、さいごのとどめをさされて、農民たちが完全にやぶれる。いわゆる谷中事件であるが、そのときには、父はすでに村から逃亡して、血みどろの谷中事件には参加していなかった。

しかし、おそらく父、作次郎も、くすりの行商ちゅうにこの土手に立って、わびしさとむなしさのはてしなくひろがる、この谷中遊水池をみたであろう。そのとき父は、なにを感じ、なにを考えたであろうか。

父、作次郎は明治九年に、栃木県安蘇郡の渡良瀬川べりの、小さな村に生まれ

た。十六歳のとき栃木県選出の衆議院議員、田中正造とめぐりあって以来、鉱毒とのたたかいに身をけずり、川俣事件以来警官に追われて村を逃亡し、さいごに富山県婦負郡の、三方を山にかこまれた一寒村に、その一生をおわった。わたしが生まれたのは、富山県の、東に立山、南に飛騨の山やま、西には砺波の山やまをあおぐ、神通川べりの小さな村であった。父は、イネがよくみのって一家がさかえるようにと、わたしが生まれたとき、めずらしくはしゃいで、「栄作」という名前をつけたのだと、死んだ母がいっていた。父のからだには、まっ赤な百姓の血がながれていたのであろう。イネを育て、ムギを育てることしか知らない、根っからの百姓の血が、父のからだにしみついて、父はどうしてもイネつくり、ムギつくりからのがれることができないように、業ふかく生まれてきていたのであろう。父はけんめいにイネをつくり、ムギをつくった。ところが父がイネをつくればつくるほど、父の生活はまずしくなり、心はみじめになっていった。父の生涯は、すべてが善意で、ただひたすら土に生きようとしても、生かしてくれない生涯であり、これでもか、これでもかと、無情にうらぎられていく生涯であったともいえるであろう。

もともと無口に生まれてきた父だった。それが無情に残酷にうらぎられ、うら

ぎられて、さらに口数のすくない父となっていった。しかし、ときには、いくらたたいてもくだけないような、ごついからだから、しぼりだすように、いきどおりを小学生のわたしにはきだすことがあった。わたしは寝物語に、父のいきどおりを息をのんできいた。

1　天皇巡幸

渡良瀬川は作次郎の遊び場だった。

屋根にペンペン草のはえる作次郎の家はせまかったが、広大な川はばをもって、清らかな水をよどみなくながす渡良瀬川は、天が作次郎にあたえた自由な遊び場だった。

作次郎は春夏秋冬を問わず、家をとびだすと渡良瀬川へ走った。春は若草を手かごにつみ、夏はよれよれの網で雑魚をすくい、秋はうれた草の実をとり、冬はたこあげをして走りまわった。

明治十一年の夏も終わりのある日、あいかわらず作次郎は、村の子どもたちといっしょに水を浴び、雑魚をすくっていた。

ナマズもフナもコイもいた。わずか三歳の作次郎にも、それは容易にとれるほどだった。雑魚は渡良瀬の清らかな流れに、安心したようにむれていたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「おい、おれがとってやるから貸せ。」
作次郎を上からみおろして年上の男の子が、よれよれにやぶれた網をとりあげた。
「いやだー。いやだー。」
作次郎ははげしく泣いた。ところがどんなにはげしい声をたてて泣いても、とんでくる村びとはいなかった。子どもの泣き声に、いちいち気をつかわなければいけないほど、世の中はきゅうくつでもなかった。村びとたちは子どもを渡良瀬川にまかせて、のどかに平和に、ハンの並木がたんぼ道にひとしきりつづく野づらで、ただひたすらイネを育て、ムギを育てていた。
「ほら、こんなに大きいのとれたぞ。うれしいだろう。」
年上の男の子は、三十センチちかくもあるナマズをさしあげて、作次郎のびくに投げいれた。なみだのひからびている作次郎の顔が、きゅうにくずれて、みちたりた笑顔にかわった。
年上の男の子は、「もっととってやるからな」ということばをのこして、腰まで水につかりながら、深みをこいでむこう岸へいって、さかんにすくった。
「かかったぞ、かかったぞ。大きいフナだ。」
年上の男の子は、泳ぐようにして、深みをこいで作次郎のところへきた。
「ほら。」
フナは、年上の男の子の手のなかから、大きくはみだしたからだを、びくびくとうごかして

いた。
「いいだろう。おれ、うまいだろう。」
あばれるフナを、作次郎の目のまえにつきだしてから、またびくに投げいれた。
そのときだった。年上の男の子と同級の、勉強のよくできる良平が、すこしはなれた石の原っぱで、とつぜんに声をはりあげた。
「おい、きこえねえか？」
年上の子も、作次郎もきゅうにだまった。そのほか五、六人の、石の原っぱで遊んでいた男の子も女の子も、耳をすました。
「……なんにもきこえねえ。」
「……そうだな、なんにもきこえねえよ。」
子どもたちは良平にむかってこたえた。
「そうか？　おれにはきこえるような気がするだ。」
良平は、まだ真顔で、はるかにつらなる秩父の山なみをみつめていた。
「……なんの音、きこえるだ？」
「ほら、馬の音だ。馬がいっぱいならんで走っていくだろう。」
「……そうかよ？」

子どもたちは、またまたけんめいに、音をつかまえようと努めた。
「……あの……馬がどうかしたのか？」
おそるおそるひとりの男の子が、良平の耳もとにいった。
「うん、あるだよ。きょうはよ、天子さまが熊谷さつく日だ。」
良平は、秩父の山なみをみつめたままこたえた。
「へえ、おれ、知らなかっただ。天子さまが熊谷さつくのか……。でも、ここからじゃみえねえべよ。」
作次郎にナマズやフナをとってくれた年上の男の子が、感心してみせてから、
「でも、こっからじゃみえねえよ。みえねえものはみえねえだ。」
と、きゅうにばかばかしいといわんばかりに、ペッと流れにつばをはいた。
「ばかっ。天子さまさむかってなんてことするだ。」
良平はすかさず、つばをはいた男の子のほおをたたいていた。
「ちぇっ。」
かなわないとみたのか、年上の男の子は、またペッとつばをはいて、そっぽをむいた。
「ほら、きこえるよ。パカパカ、パカパカと、馬のひづめの音がきこえる。長い長い行列つくって、いま熊谷にむかっているだよ。いっぱい偉いひとがついているよ。」

みえもきこえもしない天皇の巡幸に、たったひとりで感じいっている良平を、みなはふしぎな目でみあげていた。

たしかに明治天皇は、右大臣、岩倉具視、筆頭参議、大隈重信はじめ、八百名ちかい従者をひきつれ、三十六騎の騎兵と、三百四十四人の警察部隊にまもられた長い隊列で、この時刻に熊谷にむかって走っていた。すなわち明治十一年九月一日の北陸巡幸である。

「天子さまは、なさけぶかいかただから、地方をめぐって、人民の生活がたのしくおこなわれているか、みて歩いているんだぞ。」

良平は、頭がよく級長をつとめるだけあって、もの知りだった。子どもたちは、たいていの知識を良平からさずけられていた。

「明治になって幕府はたおれたが、まだ世の中はおちつかねえから、天子さまがじぶんからすみずみまでまわって、国を治め、人民の心を治めるようになったんだ。」

良平は、ようやくつきものの落ちたような、安らかな顔つきをみなにむけていった。

渡良瀬川で作次郎が雑魚をすくっているころ、天皇陛下をいただく華美で勇壮な大行列は、ぶじに熊谷に到着していた。

徳川幕府がたおれ、天皇みずからが日本の国を治める、いわゆる天皇親政になったとはいえ、明治維新の混乱はつづき、世の中はすこしも平安ではなかった。

2　自由民権

村の神社に、ひとびとがあつまっていた。社殿にはランプがひとつ、小さな黄色い光をともしつづけていた。顔もはっきりとみわけられない、うす暗い社殿のなかではあったが、あつまった男たちのそぶりには、ふしぎにかよいあうものがあった。

「よくあつまってくれた。お礼をもうしあげる。」

黄色いランプのわきに、ひとりの男が立ちあがって、あつまった男たちに頭をさげた。

「諸君はつかれているだろう。田植えのまっさいちゅうというときにあつまってもらったのは、ほかでもない。ここで、われわれの意思をはっきりとしたかたちにあらわさなければ、もはやどうにもならない段階にきているからだ。政府が諸君の地租をいつでも引きあげられるようなしくみをつくってしまったことは、諸君もすでに承知のとおりだ。諸君の地租だけでない、国の政治はかれらの思いのままになる。ふりかえってみると、天皇親政の明治の世の中になったということは、天皇陛下の御心のもとに、人民すべての意思によって国を治めていくということだった。こと薩長を中心とした天皇側近だけで、その者がつごうのよいような政治をおこなうということではないはずだ。明治の改新は、人民すべてが政治にくわわるということだった。それがどうだ……」

羽織も、はかまもよれよれで、髪とひげはのびるにまかせた、ひどくむさくるしいその男の目玉だけは、ランプに照らされて異様に光ってみえた。

「この田中正造は、家名を断絶することを父から了解してもらっておる。よってわしは諸君とともに、自由民権のためにたたかうことをちかう者である。」

田中正造は、このとき四十歳だった。二月にはじめておこなわれた第一回栃木県会議員選挙にうってでて、みごと当選していた。そのときから田中正造のわらじばきのすがたは、栃木、群馬の渡良瀬川べりの村むらにあらわれるようになった。腰にはべんとうをぶらさげて、むさくるしい髪とひげと、よごれた羽織、はかまのすがたが、あるときは村の神社に、あるときは村の戸長の家に、昼夜の区別なくみることができるようになっていた。

明治の世の中になって、それまで藩主に納めていた年貢は廃止され、かわって明治政府にすべて銭でおさめるようになっていた。これが地租改正である。ところが、地租改正になって納める税金は高かった。高い税金はおおくの農民をくるしめた。

それはまずしい百姓も富む百姓も、いちようにおなじだった。そこでまずしい百姓も富む百姓も、ともに共同の敵、地租改正にむかってたたかいをいどむことになり、さらにそのたたかいは自由民権獲得のたたかいへとつながっていった。そしてそのたたかいは、天皇旗をおしたてた大巡幸ぐらいでかんたんにおさまるほど軽薄なものではなくなっていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton